

**HUMANE
INTERNATIONAL
NETWORK
(HINT)**

—————HINT News Letter No. 63 目次—————

- Page1: HINT 第31回クリスマス記念講演会開催
Page2: 反政府組織 M23 の侵攻と現地の状況について
Page2-7: HINT 記念講演会 (抄録)
Page7: 会費納入者・寄付及び物品寄贈者名簿
Page8: HINT 事務局からのお願い
HINT 事務局からのお知らせ

HINT 第31回クリスマス講演会開催

豊かな天然資源を持つコンゴ民主共和国が厳しい現状に至るまでの歴史、奴隷貿易や植民地についての具体的なお話を伺いました。



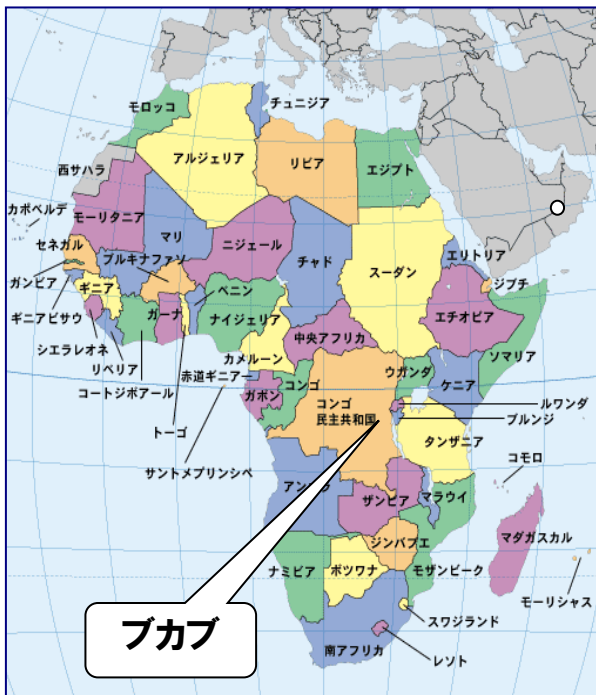
カブンディ・オノレ師(カトリック淳心会司祭)による記念講演(詳細報告 2-7 ページ)

HINT(特活) ヒューメイン・インターナショナル・ネットワークは、1994年に発生したアフリカのルワンダ虐殺時の難民支援のために創設された東京都認証NPO(非営利活動)法人です。国を超えた隣人愛を示されたイエス・キリストの教えにしたがって、開発途上国における教育や保健医療、農村開発などを通じて、国境を超えた支援活動を続けています。息の長い継続が必要な奨学金運営には31年以上の実績があり、キリスト教会やNGO団体との連携を活かしつつ、貧困状態が続く地域で多くの人材と希望を育てています。

反政府組織 M23 の侵攻と コンゴの現状について

31年間にわたり、コンゴ民主共和国（以下、コンゴと略）のブカブに住む奨学生のために、温かいご支援、ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

現在、反政府組織 M23 による現地の制圧により、すべてのビザの取得や送金が止められておりますが、現地とは直接連絡ができております。大使館などを通じ新たなルートを構築中です。皆様には後ほど、詳細なレポートをお送りいたしますので、どうぞよろしくお願いたします。



HINT 講演会（抄録）

2025年12月20日14時から東京・世田谷のカトリック松原教会で、HINT 創設31周年クリスマス記念ミサと講演会が執り行われました。四半世紀を越える長きにわたり、お支えいただいた皆様に深く感謝申し上げます。司式をしていただいたコンゴ出身のカブンディ・オノレ師（カトリック淳心会司祭）による、記念講演の抄録を掲載させていただきます。

カブンディ・オノレ

HINTの皆様に、毎年このクリスマスの機会に、コンゴ民主共和国（以下コンゴと略）の話をさせていただくということはとても良いことだと思っています。というのも、あまりコンゴの情報が日本には入らず、マスコミにもあまり取り上げられないからです。

反政府組織に制圧された町ウビラ

2025年12月14日日曜日にバチカンで行われた「お告げのお祈り」で教皇レオ14世は、特に東部コンゴにおける新たな武力衝突の発生に深い憂慮を示されました。日本のマスコミはそのようなことは取り上げませんが、先週はコンゴの東の方、キブ州というところで起きた戦闘で、重要な都市ウビラがルワンダの支援を受けている反政府組織 M23 が制圧されてしまったわけです。今のコンゴの状態は政府がコントロールしている地域と、反政府組織であるルワンダの人たちが奪った地域があります。反政府組織が都市を制圧してしまうということは、大勢の人が殺されて戦闘地域となっているということです。

コンゴはアフリカの地図の真ん中にある国です。世界で11番目に大きい国です。そして9カ国に囲まれています。9カ国に囲まれるというのは世界では滅多にないことです。海に面しているところは40キロしかありません。そしてルワンダという国は小さい。だから、コンゴの戦争は民族の戦争とかではなくて経済的な戦争です。そして土地を求めているルワンダの戦争です。コンゴでのほとんどの戦争はこの東部で行われています。

紛争が続くコンゴ

日本では知らない人がたくさんいますが、皆さんが使っている携帯電話やパソコンなどに入っているレアメタル(希少金属)とコンゴはつながっています。東のほうで戦争が起こりましたが、首都のキンシャサは西の海のほうです。政府はすごく遠くにいます。私自身の町はちょっと真ん中の南のほうにあります。コンゴではいつも紛争が起こっていて、1回だけ私の町にまで入ってきました。ちょうど今年(2025年)の8月に行ってきた、この紛争で自分の母の妹が教会で殺されてしまいました。日本では小さなニュースでしたが、国際的には大きなニュースで、祈っていた人たちのところにイスラムのテロリストが入ってきて、皆を殺してしまいました。その中に自分の叔母もいたわけです。

コンゴの天然資源と児童労働

コンゴが持っている天然資源は私たちの使っている携帯や電子機器などにつながっています。主にコンゴの東のほうが一番豊かです。この天然資源のコルタンこそ、携帯にはなくてはならない材料です。このコルタンは世界で80%がコンゴでの産出になります。ブラジルでは5%、タイでは5%、そしてオーストラリアは10%になっています。

そのコルタンを使っている会社は世界中に沢山あるわけですが、現地で紛争があれば、政府の法規制やコントロールが及ばないということになり、彼らは密かに自由にそのコルタンを取れるということになります。コンゴは、世界が求めているものをこれほど豊かに持っているのに、いつもあまり発展していない国と言われますが、発展しない理由がここに 있습니다。

このコルタンは、地面を20メートル、30メートルと下に深く掘らなければ入れません。そういうときに子どもたちが使われます。体が小さい子どもを穴に下ろすことができるからです。そして、子どもたちが働くということは、学校には行けないということになります。さらに事故が起こるわけです。手で掘って、あまり機械を持

っていないから、地面が崩れてしまうと、中に入っていた人たちは地上に戻れないのです。

少年兵のマインドコントロール

そして少年兵の存在があります。実際に戦っている人たちの姿を見ると大人ではありません。そういう子どもたちは、目の前で親が殺されてしまったから、あなたは復讐ができますよと言われます。マインドコントロールです。だから紛争がずっと続くのです。反政府組織 M23 はこういう子どもたちを先頭に出して戦い、殺されてしまえば大げさにコンゴの政府は子どもを殺していると言います。実は反政府組織はこのようなテクニックでコンゴを悩ませているわけです。

このコルタンが新たなところで見つかる、開発のためには、そこに住む農民を移動させないといけなくなります。日本では、たとえば新幹線を作るときには、何十年もかけて、そこに住んでいた人々を納得させて土地を買ったりするということになりませんが、向こうではそうしません。いろいろな会社が、無理にでもそこにいる人々を移動させるということになります。つまり、そこで紛争が起きて人が殺されればパニックの状態でみんなが逃げるわけです。



村を焼かれ、子どもを背負って逃げる女性

こうして毎日のように、人々が移動しないといけなくなっています。この女性(写真上)は自分の村全体が燃やされて、人々が殺され、逃げているところですが、でも逃げたとしても、どこへ行くのか。子供たちは親が殺されて、これからどう

やって生きていくのか。死んでいるのは親で、そして孤児が残る。この子は成長するにつれて、あなたの親はこのように殺されたのですよと言われ武器が渡されると、自分が復讐するということになります。親が殺されると一番大きい子供が自分の弟や妹の面倒を見ます。親がいないから子どもは瘦せています。教会は拠り所になり、彼らに食事を提供することが考えられています。

ストリートチルドレンが生まれる理由

いろんなところで孤児の施設を作ったり、何とかして紛争から逃れていった子どもたちを助けたりしています。おかげさまでいろいろなNGOや教会が、すごく力を入れて手伝ってくれています。こうして助かる子どもは助かりますが、助けられない子どもも多くいます。それがストリートチルドレンです。ストリートチルドレンとは、ホームレスです。日本ではホームレスというと身寄りのない高齢者とか、仕事を失っている人ですが、向こうのホームレスは子どもです。このような状況が恒常的に起きています。

時には我々地元の人たちはこう言います。「もうコルタンをこの国から全部取って行ってください」と。人々はコルタンを食べません。地元の人たちのために役立つどころか、何で使われているのかも知らない人が多いです。それなのに、コルタンを取るために戦わせる。この現実はやっぱり悲しいです。私自身はコンゴ人ですが、向こうにいて兵士との関わりもよくありますが、このような子どもの姿を見ると心が痛みます。自分たちの未来が奪われたということになるからです。子どもたちにとって、人を殺すということは簡単ではありません。だから麻薬を飲ませられると自分が何をやっているのかわからなくなります。そうすると、本当に彼らの未来はもうダメになるわけです。自分の国にあるのはこのような現実です。

奴隷売買

それでは、コンゴの天然資源の利益はどこに行くのか。今の現実を遡ると長い歴史がありま

す。それはまず植民地、コロニズムということです。でもその植民地の前には 奴隷売買がありました。コンゴの現在の社会的、経済的また政治的な形を作ったのは ベルギーからです。しかし、歴史的にはベルギーだけではありません。植民地はベルギーからでしたけれども、ベルギー、フランス、ドイツとアメリカも関係があります。



アフリカ分割の風刺画

しかし、アメリカは表に出てきません。例えば先ほどの東コンゴにあるほとんどの会社はアメリカ資本です。そしてイギリスも。コンゴを植民地にしたわけではありませんが、彼らはいろいろなルートを使って自分たちの活動または仕事をやっているのです。

どうしてベルギーだったのでしょうか。ベルギーを80倍にすればコンゴになりますが、そんな小さい国なのにどうしてコンゴなのか。それは、当時の大体のヨーロッパの国々が弱い国であるベルギーにコンゴを渡せば、みんなが自由にこの場所に入れるということを考えたのです。昔はフランスが強い国でしたが、フランスは隣の小さい今のコンゴ共和国を植民地にし、ベルギーがコンゴを植民地にしたのです。

アフリカの歴史・コンゴ王国

西欧人がコンゴに入る前には 私たちの歴史では14世紀には既にコンゴ王国が存在していま

した。コンゴ王国には初代マニコンゴ（コンゴ王）のような力を持った女性もいました。コンゴの歴史では女性が強く、向こうでは母親に対する尊敬がすごく深いです。そして、15世紀にポルトガル人が入ってくるわけです。

コンゴを訪れていたポルトガル人は、この頃、こういうダイヤモンドとかコルタンなどは全く知りませんでした。しかも奴隷売買もまだ実行されていませんでした。ちょうどコンゴ側が海に面していたところに入ってきて、ああ、こんな大きい国があると。そしてコンゴの森林がアマゾンとほぼ同じ森なので、びっくりして、いろいろな人を派遣して、いい関係を結んだわけです。そしてお互いにいろいろなものを交換したり、コンゴにあるものをポルトガル人にあげたり、そして宣教師もこの頃にコンゴに入ってきました。アフリカの最初の司教はコンゴ人でした。その頃、今のコンゴとアンゴラと隣のコンゴ共和国とザンビアはほぼ同じ王国に属していました。



鎖で繋がれたアフリカの奴隷の姿

ところが、突然植民地で分けられてしまったのです。たくさんの国が奪われてしまったのは植民地の時代です。でも最初の西欧人が入ってきた時には今のアフリカは存在していませんでした。もっと大きい王国とか小さな王国があり、お互いに平和に共存していたわけです。そして彼らが入ってきて、9年間コンゴにあるものをよく見て、そして同時期にヨーロッパ人はアメリカで奴隷を必要とすることになります。まだまだトラクターがない時代です。アフリカ人がも

っと働けるだろうと思って何百万人の人がアフリカから連れて行かれたわけです。そしてうちのコンゴもかなりの数が奴隷にされたのです。

奴隷貿易のはじまり

奴隷と聞くと日本ではもしかしたら分からないかもしれませんが、私たちが歴史から学んだことは、奴隷制度というものはほとんどの国にあったという事実です。イエス・キリストの時代でも奴隷がいました。昔のエジプトの時代にも奴隷（制度）があったわけです。コンゴの場合ですが、この奴隷売買が始まる前に、人殺しとか牢屋にいる人たちは、村のためには危ない人物ですから売るわけです。それをするのは村の村長とか王様とかでした。犯罪者を反省させるために隣の村の隣の王様に売る。それは罪を反省させる一つの方法だったのです。それで最初の奴隷売買の動きは、村長とか王様たちがやっていたことに従ってこれらのものを売ったり買ったりしました。そこまではまだまだ大丈夫でした。それは普通、ほとんどの国でそうされていたからです。でも非常に複雑になったのは、もっと奴隷が必要となって、無理に村や町に入って、そこに住んでいる人々を男女にもかかわらず、悪い人じゃなくてもみんな無理に連れて行くという、それこそ非人間的な奴隷売買となったわけです。これこそ私がアフリカ人として、西欧人に対して野蛮な文明だと思うことです。民間人を動物のように売る、買う。そして無理にアメリカなどに連れて行くということ。これが400年間も続きました。

この奴隷売買は人々がいつ捕まるか分からず、キリスト教へのイメージも悪くなって恐怖を覚えたわけです。なぜかという、商売をやっている人たちはキリスト者ではありません。しかし白人ですから 当時の宣教師も白人であるので 区別することはできなくなってしまった。

犬であっても飼い犬であればよく扱うわけですが、奴隷が従わないと暴力で殺すところまでいく。これが悲しいアフリカの歴史なのです。

アメリカに連れて行かれていった人たちは

首や手が鎖で繋がれます。そして途中で疲れた者は殺されます。海に投げ込まれるわけです。健全な者だけを連れて行く。今では飛行機に乗って数時間ですが、昔は船で移動すると疲れも出てくるし、病気も生じてくるし、そうすると何千人もの人が旅する途中で海に捨てられてしまったということが分かっています。その人々に恐怖を覚えさせて運ぶために広場で殺したりもしました。これはアフリカ全体でのことですが、うちのコンゴのことでもあります。

奴隷貿易の終わりと植民地

奴隷売買は結局 19 世紀に入ると一方的に西欧人が終わらせます。どうして終わりを宣言したのでしょうか。それはトラクターができたからです。人間よりも機械のほうがもっと働ける、収入が入る。そうすると奴隷はもう必要ではなくなります。それでアメリカから非人間的な商売を禁止して、そこで初めて、例えばアメリカで解放された黒人（元奴隷）が建国した“世界唯一のアフリカ系アメリカ人による入植国家”であるリベリアという国が生まれてきます。シエラレオーネもその中から出てきます。そして奴隷から戻ってきた人たちは、もう行くところはないから、そのリベリアなどに行かされたわけです。私の先祖たちはその奴隷売買が終わったことで安心して、これからはいい時代だと思っていました。その奴隷売買の歴史から、今度は植民地の時代に入ってしまう。

ベルリン会議というのはドイツで行われた 1884 年から 1885 年にかけて アフリカを分割する会議です。奴隷売買が終わったと言っても西欧人は、このアフリカを手放す気はなく、なぜかという自分たちがこの 400 年間の間に色々なものを発見したからです。自分たちの国を発展させるためのいろいろな資源を見つけたので、それで 1885 年にアフリカが分割されて、まるでケーキを切っているかのようです。フランスはこれが欲しい。ベルギーはこれ。ドイツは自分たちでというように。

アフリカ人は一人もそこにいませんでした。

今のアフリカの紛争の問題がそこから出てくるわけです。これらの国がアフリカの国を分割するときに、現地の人たちの文化や繋がりなどは分からずに区分してしまったわけです。そうすると、例えばこの村の先祖たちのお墓は別の国にある。自分の先祖の足はコンゴにある、頭はルワンダにあるというように。

しかし、昔は私たちアフリカでは本当に戦うというよりも何らかの形で平和共存できる形を作っていたのです。言葉が豊かでたくさんの言葉を持っている。日本では日本語だけですけれども、うちのコンゴではびっくりするほど 400 言語もあります。でも、人々がお互いに理解し合うという言葉を決めていて、その 400 から 4 つの大きな言葉で会話できる。南から北へ行くときには、北の言葉もしゃべれるようにというシステムができていました。ヨーロッパではそういうことはわからずにアフリカを分割してしまったのです。



植民地時代に右手を切断された子どもたち

レオポルド 2 世の残虐な統治

このベルリン会議で、私たちコンゴ人にとっての不幸は決まったということになるわけです。1885 年から、コンゴはベルギー人の王レオポル

ト2世個人のものにされました。その時から1909年まで、本当に信じられないほどの残虐な行為がコンゴで起こってしまいました。強制的にゴムのプランテーションで人々を働かせて、王様が求めていた収穫物を出させるのですが、できない人は手が切られたのです。信じられないでしょうが、子どもでも手や耳を切ったのです。

当時のヨーロッパでは、特にマスコミは、アフリカの植民地は自分たちにとって、「文明／Civilization」というものを持ち込む場所だという考え方でした。アフリカの人たちは歴史がない、文化がないから、彼らを文明化するために文明を持っていくという考え方でした。でも愚かなことにアフリカの歴史はすごく長いのです。遥かに長い歴史を持っている。文化もすごく長く、深いものを持っているわけです。

例えば、北アフリカのエジプトとか、ヨーロッパの国々の前に、エジプトでもすでに大きな文明があったわけですね。そしてエチオピア。ナイル川沿いに発展した文化がすごく、西欧よりも長い文化がありました。聖書にも取り上げられているように。コンゴの東の方は、エジプトのナイル川にまで行くのです。その文化を持っていた人々を無視し、ヨーロッパの方から文明を持ってくるというのです。ベルギー、フランス、ドイツなどの国民たちは、コンゴとかアフリカの話になると、アフリカで自然の森の中に入っていたら、アナコンダ（大きいヘビ）がいたとか、大きい虫がいて噛まれるとか言いますが、嘘です。私は生まれてからこのかた、そのようなものは見たこともありません。ヨーロッパではいろんな作り話が面白く話されていましたが、現実では多くの人々が殺されているということが隠されていたわけです。

こうしていろんな人が、これ以上は我慢ができないとなってコンゴ独立運動が始まりました。よく知られているのは独立運動の先頭に立っていたルムンバ首相です。そして彼も、結局長く国を治めることができず殺されてしまいました。彼の獄中からの最後の手紙は非常に印象的です。

こうしてコンゴの独立を宣言する日に、ベル

ギーの王がコンゴを訪れ、綺麗なスピーチがされました。まるでコンゴ人に対して、この独立は王からのプレゼントだと言わんばかりでした。しかしコンゴの人たちは、自分たちの先祖が殺され、たくさんの人々が失われてきた自分の国が、ようやく独立できたのだと考えたのでした。

会費納入者・寄付者及び物品寄贈者名簿

(2025. 11. 1-2026. 4. 30・順不同・敬称略)

武井 弥生	安達 裕美
桃井 和馬	村井 厚子
岸田 万紀子	安藤 和彦
カトリック松原教会	市川 幸一
森川 浩一郎	古城 かほる
狩野 繁之	武田 知子
窪田 愛子	比嘉 勇也
小幡 行弘・朋子	藤井 由雄
池田 ゆう子	禹 満
高澤 佳代乃	四條 淳也
神山 和美	山田 篤
末永 秀雄・美津代	岡田 多恵子
大野 容子	野坂 俊弥
岡田 直子	進藤 重光
西嶋 久恵	松尾 武康・徳子
匿名の皆様	

支援・ご協力ありがとうございました。

★上記期間内に会費納入やご寄付をされている方で、名簿に載っていない方は、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

★HINT は皆様の会費で運営されています。31年以上の歴史の中で、1000人以上の奨学生たちが学び、卒業生が現地で活躍しています。

★封筒ラベルの一番下にある日付が、最後にお振り込みをいただいた直近のお振り込み日となります。

★郵便局の振込金受領書は、正式な領収書ですので、大切に保管してください。

★振替用紙は郵便局から事務局にコピーが届きますが、判読しづらい場合があります。楷書で分かりやすくご記入いただきますとたいへん助かります。

★特別なご支援（特定寄付）の場合は、その旨をお知らせいただけますと幸いです。

HINT 事務局からのお願い

会費振込のお願い

皆様の会費やご寄付が命綱です。お振り込みは同封の振込用紙を使用していただくか、下記口座へお振込みくださいますようお願いいたします（賛助会員：1口5,000円から・学生会員：1口2,000円から。ご寄付の場合はご随意にお願いいたします）。

■郵便振替：00120-1-596327

口座名義：特定非営利活動法人 HINT

■ゆうちょ銀行：

記号 10010 番号 26990711

（他銀行から振り込む場合 店名：008

種目：普通 番号：26990711）

口座名義：特定非営利活動法人ヒューメイン・インターナショナル・ネットワーク

■三井住友銀行：新宿支店

普通預金：3390001

口座名義：特定非営利活動法人ヒューメイン・インターナショナル・ネットワーク

● 2026年度の役員・ボランティアを募集します

2026年度の HINT 役員とボランティアを募集しています。非営利活動を支えるのは、皆様からの大切な会費収入と同時に、日々の小さな事務作業の積み重ねです。役員は総会で選任され、定期的な理事会に出席し、HINT の実務的な業務をしていただきます。

印刷作業や荷物運び、翻訳などのテンポラリーなボランティアの仕事もあります。登録ボランティアとして、メールアドレスをご登

録いただき、ご都合のつく時に、実務的な作業に随時ご協力いただければ幸いです。皆様の積極的なお申し出をお待ちしています。

ご連絡・お問い合わせ先：HINT 事務局

e-mail: hint_info@epopee.co.jp

HINT 事務局からのお知らせ

《HINT総会のお知らせ》

日時：2026年6月28日(日) 15:00~16:00

場所：カトリック松原教会2階 活動室2-1

住所：東京都世田谷区松原2-28-5

TEL: 03-3321-0941（下記案内図参照）

アクセス：京王線「明大前駅」下車徒歩5分

2026年度のHINTの総会を開催いたします。

議題：2025年度活動報告、2025年度決算、2026年度役員改選、2026年度活動計画、2026年度予算計画等。

どなたでもご参加いただけます。ほとんど報道されることのないアフリカで何が実際に起きているのか。世界が抱えている厳しい現実とは何かなど、HINTの活動について、ご関心のある方は是非おいでください。事前のご連絡は不要です。総会後に、新たな出会いが生まれる懇親会（自由参加／会費別）も予定されておりますので、ぜひご参加ください。



特定非営利活動法人ヒューメイン・インターナショナル・ネットワーク (HINT) 事務局

〒164-0002 東京都中野区上高田 5-43-1 グリーンビル 2F 平兵衛√2 内

電話&FAX:03-6336-9624

e-mail: hint_info@epopee.co.jp

ホームページ: http://www.epopee.co.jp/hint